



2011.8.25

No.168

編集 樋口 みな子

E-mail [minginga@agate.plala.or.jp](mailto:minginga@agate.plala.or.jp)  
<http://briefcase.yahoo.co.jp/bc/ginganews150>  
郵便振替「銀河通信」  
02740-7-56535  
(郵送6号分1,000円)

## ゆきあいの空



8.7 ゆきあいの空と表大雪の山々



青空にイワギキョウが映えて

東日本大震災から早5ヶ月。最近ではニュースで伝えられることも少なくなりました。政府もしっかりとした方針を出して一日も早い復興と被災者が安心して暮らせるように努力して欲しいです。

一雨ごとに涼しくなり、刷毛で掃いた

ような巻き雲が見られるようになりましたね。夏と秋がすれ違うのがゆきあいの空と知りました。美しい言葉ですね。3.11で亡くなった多くの人たちと、被災された人たち、そして、4月に旅立った父のことを思って、ふと空を見上げることが多くなりました。8月13日、新盆のお墓参りを済ませ、ペルセウス座流星群が夜空に流れるかも知れないと北東の空に目をこらしました。でも月が

邪魔して見られませんでした。明け方なら眺められたかしら。願いを託したかったです。

ある本で「風にきく、大地のうた」という座談会の記事を読みました。フランスの大学で風土学を研究されているオギュスタン・ベルクさんと、小野有五さん、フランスで人文社会学の先生をしていらっしゃる雨宮裕子さん。ベルクさんは東北大学にいらしたこともあり、とてもいい提言をされていますので紹介します。風土は3つの大きな価値と関連している。一つは善という基本的な価値、ほかの人に悪を及ぼさないこと、二つめは美。殺風景な、風景を殺すようなお金儲けのシステムはこれに反する。第三は真。真に反するとは、持続不可能な生活の仕方。つまり環境を壊す生活は間違っている。本当の人間的な価値を生きられる社会にと提言しています。小野有五さんは先住民族のマオリの人は自然が自分を作っていて、その絆が切り離されたら自分は存在しないと考える。人間は本来そういうものではないかと述べ、原発とは何かあった時に、その場所性を全部断ち切るもの。だから美しくもないし、持続可能でもない。人間が判断を間違った結果の技術ではないかと思うと述べていて、お二人の意見にとっても共感しました。命が脅かされるような原発はそれだけで、あってはならないものだとは思いますが。スイスやドイツ、イタリアではすでに脱原発で動いているのです。日本も出来ないことではないと思います。また雨宮さんは、ブルターニュ地方の農家に福島の人たちへの受け入れを呼びかけると、「部屋が空いている」「うちの畑を使って」と申し出があったと語っていて、私まで嬉しくなりました。黙って耐えるのではなく、政府に要求していくことって大事だと思いました。

7月7日に「泊原発の廃炉をめざす会」が発足しました。300人近い人が札幌の会場に集まり、道民の関心の強さに励まされました。



7.23 鳥海山の頂上で

世話人の小野先生が各地で、脱原発の講演会に出かけています。8月19日は野幌であり、夫と参加しました。小さな会場に70人が集まり、質問もたくさん出されました。夫は発言はしませんでした。「科学するって、事実を積み重ねていくことなんだな」と理科教師として教えられることが多かったようです。私は廃炉の会で事務処理や電話番号などボランティアでお手伝いすることになりました。



8.6 北鎮岳を望む

# 雄大な雪渓と高山植物の宝庫 鳥海山 (2236m)



7.23鳥海湖とニッコウキスゲ

自粛ムードの中、7月22日、思い切って秋田にと旅立ちました。JAC秋田支部の福田光子さんにお世話になり23日、鳥海山の象潟コースを登りました。登るならこの日しかないという友人の言葉に従い4時に起き、車で山形との県境の鉾立の登山口出発は道に迷ったこともあって7時45分でした。往復10時間の長いコースを覚悟を決めて歩き始めました。



遊佐町から見る鳥海山

鳥海山は日本海に裾野を長く浸した美しい山容に、ずっと登って見たい山の一つでした。活火山です。

最初は曇っていて鳥海山の全貌は見渡せません。やがて湿原が広が

り小さな沢のある賽の河原に出ました。ニッコウキスゲの群落に歓声をあげる。雪渓が涼しく、しばしの涼をとり、石段の急登を登り切ると、草原状の広い斜面を登ると御浜に。見え隠れしていた鳥海湖のブルー、鍋森の緑、ニッコウキスゲの鮮やかな黄色がすてきです。

御浜神社と山小屋もあり修行者たちの休息所にもなっていたことがわかります。お花が目的の登山者はここから引き返す人も。これから長い登山です。

御浜から火山礫の道をたどって扇子森、八丁坂と続きます。ここまではほぼ順調に進みました。お花は今が盛り。ハクサンイチゲ、ミツガシワ、アオノツガザクラ、ミヤマキンバイ、チョウカイアザミ、ハクサンシャジン、トウゲブキ、ヨツバシオガマ、イワギキョウ、イワカガミ、ミヤマリンドウ、ハクサンフウロ、コバイケイソウ等数えきれないほど百科繚乱に感激でした。福田さんは年に一度は必ず鳥海山に登っていて解説してくれるので、登山がより楽しい。分岐点の七五三掛(しめかけ)で、左に進み巻道を慎重に下りトラバース。雪渓がひんやりして気持ちがいい。ここからまた長い急登。つづら折りの登りは心臓破りです。ようやく頂上御室に着いたのは12時半でした。鳥海山の奥行きの高さと大きさに感動しました。

山小屋と神社が建ち、たくさんの人たちが食事しています。私も縁起をかついで、お守りを買いました。頂上に向かう途中で下山中のサブザックの軽装姿の登山者に出会いました。山小屋があるとはいえ、装備は万全であって欲しいですね。

天気がいいうちに頂上新山ドームに向かいます。巨岩絶壁に一瞬たじろぎましたがザックを背負い登り始めました。岩渡りです。緊張を強いられながらもようやく新山に。胎内潜りもあり、スリル満点。2236mの頂上に立つと、なんと山形の高校生20人ばかりが記念撮影中でした。彼らがひょいひょいと身軽に駆け下りていくのを横目にやっとの頂上を満喫しました。



トウゲブキ



イワイチョウ

私たちはさらに欲張って火口壁の急斜面を登って七高山に。ここが一等三角点です。遭難の多い場所だそうです。慰霊碑がありました。眼下に日本海と庄内平野が見えました。東北の山々はかすんでいました。



一年中消えない雪渓

鳥海山固有の花、チョウカイフスマが愛らしくたくさん咲いていました。ここまで来なければ見ることはできません。後は安全に下山するだけ。外輪コースをたどり、干蛇谷の分岐からは元きた道を迎

って登山口に18:30 長い登山でしたが、コースは変化に富み楽しかったです。元気に誕生日を迎えることが出来、達成感に満たされました。



チョウカイフスマ

鳥海山は水の山です。降雪量が多く、貯水力が大きいことが翌日の湧水巡りでよく分かりました。

## タイム

鉾立の登山口/駐車場7:45 賽の河原  
8:55 御浜小屋9:35 干蛇谷11:00  
頂上御室12:30 昼食 新山13:20  
七高山14:10 三五七掛15:40  
御田ヶ原16:45 御浜17:00 鉾立1  
8:25 駐車場18:30

東京から自然保護委員の有志が、鳥海山の湧水観察会で酒田のKさんの別荘に集まっていて、交流会が楽しかったです。Kさんは山岳会の仲間ですが、鳥海山の自然が好きで四季を通じて、酒田を拠点に写真を撮っています。いつか鳥海山の写真を拝見したいです。



頂上御室

# 鳥海山の湧水巡り

## 釜磯海岸・牛渡川・獅子ヶ鼻湿原



7.24釜磯海岸の伏流水には数多くあります。

7月24日、まず最初に行ったのが釜磯海岸でした。海水浴客がいっぱいになると、どこにあるか見つけられないから早朝に出かけました。世にも珍しいという、水の湧いている海岸です。上の写真は砂の中からぼこぼこと伏流水がわき出ています。岩の小さな隙間からも冷たい伏流水が流れていました。探すといくつもあって、自然の不思議さに感動しました。ミネラル豊富な湧水がそのまま海に流れ込み、その独特な環境が美味しい牡蠣を育てるのだとか。生臭い牡蠣は苦手でしたが、ここで採れた岩牡蠣はまったく癖がなく美味しかったです。

次に訪ねたのが牛渡川。サケの人工孵化場のすぐ上流です。とて



清流の牛渡川



牛渡川のバイカモ

もきれいな清流です。（右写真）バイカモが清流に涼しげに咲いていました。（左下）バイカモが住めるのは水温15度前後の渓流や湧き水など。清らかな水環境のもとでしか生育しません。その裏手には「丸池様」と呼ばれ地元で信仰を集める池が原生林の中にひっそりと広がっています。水深が3.5mというエメラルドグリー

ーンに輝くこの沼の水源も全て鳥海山の伏流水です。



エメラルドグリーン神秘的丸池



胸腹滝

胸腹滝は鳥海山の伏流水が山腹から湧き出ている様子が身体の「どうっばら」から湧き出しているという例えで名付けられたそうです。（左写真）冬でも凍らないので、美味しい水を汲みに来る人たちが絶えないとか。

最後に訪ねたのが獅子ヶ鼻湿原です。ブナ林を

流れる湧水出つぼ、大量の水が湧き出す奇形のブナ林。鳥海マリモ、水温が低いため霧が沸き立つ清流と、湿原の中は暗くてもものけ姫に出てきた、しし神の森を彷彿とさせます。獅子ヶ鼻湿原のブナ原生林には奇形ブナがそちこちに見られます。「あがりこ大

王」と呼ばれる奇形ブナは幹回り762cm、推定樹齢300年以上の巨木です。（右写真）森は奇形巨木がいっぱい。まるで妖怪が住んでいるよう雰囲気でした。

ブナの奇形は気候のせいではなく、人間の手が加わったことによるものと言われています。森の中には炭焼きの跡がいくつもありません。曲がりくねりながら、それでも生きてきたブナたち。威厳があり、まるで人間でいえば長老のようだなと思いました。

鳥海山の伏流水が大量に湧き出る出つぼがいくつもありません。水中に鮮やかな緑色のコケは大きくて絨毯のよう。有名な鳥海マリモです。阿寒湖のマリモを想像したら、全く違います。

山形、秋田のお酒が美味しいのは鳥海山の伏流水の恵みだったんですね。山形県は滝の数は日本一とのこと。信仰の山でもある鳥海山。いつまでも大事にしたいですね。私にとっても忘れがたい山になりました。



後方の巨木はあがりこ大王

## みな子の山旅日記

# 雄大な目国内岳を眺めながら 白樺山～シャクナゲ岳縦走

6月30日快晴。仲間9人で、白樺山～シャクナゲ岳を縦走しました。ダケカンバの林、登りにくい岩の登りを過ぎると展望が開け、目国内岳がどっしりとして雄大です。シャクナゲ沼も美しかったです。平日で登山者は私たちだけ。静かな山を楽しみました。  
タイム：登山口10:15 白樺山頂上11:05 出発11:20 分岐13:00 シャクナゲ岳頂上13:30 出発14:10 神仙沼15:45



目国内岳が雄大です！

## 湯の沢から万計沼



7月6日、JACの沢研修は湯ノ沢から万計沼です。水がきれいなので今回は、沢を楽しむゆとりが少しありました。

50mも続くなめ滝がきれいで楽しかったです。幅30センチのゴルジュはおっか

なびっくり。先を行くKさんが、両足を踏ん張りきれなくても沢に足場があるから大丈夫だよとってくれたのであまり怖い思いはしなかったです。

一番の難関は、大滝の右の足場の悪い草つきの斜面。Kさんがロープを垂らしてくれ、私はロープにつかまり、滑りながらもなんとか突破。

14人全員が、突破するのに丁度30分でした。（左写真）

林道にでるまでの、少しの藪こぎで蚊にもたくさん食われたけれど暑気払いができて、楽しい一日でした。

タイム 林道出発8:17 530m入渓 9:05 650mナメ滝 9:55高巻き10:45  
～11:15 林道 12:05 万計沼 12:35万計沼出発 13:15 空沼岳登山口 14:40



6.30シャクナゲ岳頂上で



## 漁川から漁岳



8月21日にJACの初心者沢研修で漁岳に登りました。メンバーは12人。そのうちベテランリーダーが3人です。

林道出合入渓は8:50、快調に進み、標高900の滝を直登し、大滝が豪快です（9:45）左写真

一番の難所の左ザイルを慎重に登るとトイ状の滝が美しい。続くナメ滝の茶色の岩盤がきれいで気持ちいい。こんな沢がいつまでも続いたら楽しいなと思っていると二股の枯れ沢の左に行く。笹藪のトンネルをくぐっているときに、雷が鳴る。雨がポツツときて、頂上まで行ける



ロープを使って慎重に

かしらと不安になりました。コルに急ぎます。急峻な恵庭岳が雲の合間から顔を出している。コルから約20分、12:00丁度に漁岳頂上でした。天気はくるくる変わり、すっきりした眺望ではありませんでしたが、一瞬、コバルトブルーのオコタンペ湖が顔を出し一感激でした。

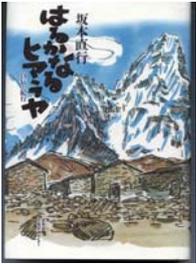
午後からは雨の予想。12:40同じコースを辿り、林道に15:40でした。湯ノ沢に続く2回目の研修は、皆足運びもスムーズになったとリーダーの講評があり、楽しく終わりました。



7月2日に大平山、7月10日は一日中雨の中でチロロ岳に、7月16日には深川のオロエン川の遡行を楽しみました。7月29日～8月1日はJACの自然児学校で日高町、8月6～7日に高山植物パトロール登山で赤岳とニセイカウシュッペに登りました。

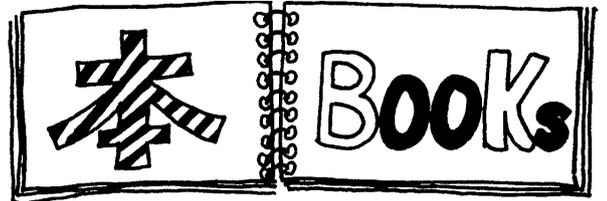
鳥海山に大きな紙面を使用しましたので今号は省きました。

この紙面は今田美知子さん、鈴木貞信さん、京極絃一さん、岡田秀二さんから提供いただいた写真を使わせていただきました。ありがとうございます。



## はるかなるヒマラヤ

坂本直行著 北海道出版企画センター  
2400円＋税



私は直行さんと直接お会いする機会はありませんでしたが、直行さんが日高山脈横断道路建設に反対し、日高山脈の保全を行政に強く訴えて下さったことは知っていました。当時、私も

大雪と石狩の自然を守る会で自然保護の市民運動に参加していました。私たちは親しみをこめて直行さんと呼んでいました。

本書は山岳画家の坂本直行さん（1906～82年）の埋もれた文章を一冊にまとめています。編集したのは北海道登山史研究家の高澤光雄さんです。

直行さんが地元雑誌に連載した自分史とヒマラヤ紀行文に、長男、登さんが書いた直行伝も収録しています。

「山と絵と百姓と」の自伝で、版画にも才能を発揮したこと。版木がなくて百人一首の板カルタの裏をほじってしかられたエピソードや、北大に入学すると、山と花の栽培、山の絵に没頭したことが語られます。スキーのシールが登場したのが、大正末期から昭和の始まりにかけての3年ぐらいの間であったというのも興味深かったです。山歩きも本格的で、直行さんらは銭函峠から奥手稲～三段山（百松沢山）～砥石山を一日で楽に歩いてしまったとか。だからこそ十勝での厳しい開墾生活も、貧乏をのぞいては苦にはならなかったと語ります。直行さんは「厳しい開拓生活も僕にとってはあの登山の時の苦痛と喜びが交錯するキャンプ生活と少しも変わるところがなかった。一僕は原野にひそむ何かを探し当てた時に、僕の心はいつのまにか原野に根を下ろし始めていた」と書き、広大な原野と後方に連なる白銀の日高山脈を見つめ続けた直行さんのまなざしの深さを思いました。

地元の雑誌に連載した「はるかなるヒマラヤ」は直行さんの思い入れが深く、生前から出版を望んでいたそうです。

直行さんが念願のヒマラヤスケッチ旅行に出かけたのは1967年、61歳の時。その後2度ネパールを訪れました。小学生の時にヒマラヤの幻灯で8500mのカンチェンジュンガの高さに驚き、いつかは見に行きたいと願ったのがようやく実現。「夕日に赤く映えるヒマラヤを現実に見た瞬間、あふれ出る涙をおさえることができなかつた」と書いています。船と汽車の旅は途方もなく長く、4ヶ月間で7～800kmも歩いたというのですから、今とは隔世の感がします。一方で、豆のようなイモまで捨てる貧しい農民や、やせ馬を見ては自分の貧乏な農民生活と重ねて、美しいヒマラヤを眺めて手放して喜べないとも書くのです。謙虚で心やさしい直行さんに共感しました。強靱で剛直な人柄だけでないユーモラスな一面にも出会えた本です。扉も含め、随所に直行さんのスケッチがあり、3年前にヒマラヤトレッキングした私には懐かしく嬉しかったです。

## 母の語る小林多喜二

小林せき（述）小林廣（編）萩野富士夫（解説）  
新日本出版社 1400円＋税



「それ、もう一度立たぬか、みんなのためにもう一度立たぬか」と多喜二の頬に自らの頬をすり合わせて叫んだ母セキさん。小林多喜二虐殺以来、13年間の忍苦を一気に払うかのよう「お天道さまを仰ぐような明るい気持ちで」多喜二を語ります。

多喜二の姉チマ家族と親しい間柄であった小林廣さん（縁者ではありません）がセキさんの話を聞き取ったのが60年を経てようやく日の目を見ました、萩野氏が市立小樽文学館に寄贈

されている第一次原稿を読み、その資料的な価値の高さに驚き、編者のご子息を訪ね、第二次原稿もあることが分かり、それらを合わせて整理し出版にこぎつけました。

扉にはセキさん自筆の母としての痛切な思いがつつられています。「ああ、またこの二月が来た。本当にこの二月という月が嫌な月、声を一杯に泣きたい どこへ行っても泣かれない。ああ でもラジオで少し助かる ああ涙が出る 眼鏡がくもる」と。

セキさんの語る家庭の雰囲気はこんな一節によく現れています。「多喜二の語る学校のこと。世間のことがいつしか一家の勉強になって、知らず知らずの内に、私たち夫婦でさえ色々なことを覚え、夕げの後の楽しさはまことに和やかなものでありました」。

多喜二への母としての愛情と信頼は、どんな状況になっても終生変わらずゆるぎのないものでした。セキさん自身「太陽は総てのものを平等に照らし」「天は自ら助くるものを助く」という信念を持っていました。15歳で結婚し、秋田の農家が没落。北海道小樽に移住、菓子店を営み、多喜二も姉もパン工場を手伝って学校を出ました。豊かではないけれど、小林一家の温かな雰囲気がセキさんの口から語られます。働くことが好きだったセキさんは、いつか多喜二らが目指した時代がきくと来ると信じ続けたのです。戦後、多喜二を語れることを喜び「今日になって多喜二の考え方は正しいものであったとはっきりと認識させられます」と語っています。「世間の人々が幸福になって、自分も幸福を受ける」というセキさんの生き方は多喜二にも受け継がれていたことに感動しました。

多喜二の恋人、田口タキへの親愛のこもった回想や、多喜二の没後の小樽での生活なども語られています。三浦綾子の「母」では秋田弁でポツポツ語るのとは違って標準語です。秋田弁は使ってなかったという家族の証言もあります。違和感は少しもなく、母としての思いがより強く伝わってきました。子供を信じ切るというのは何と難しいことだろうと日々感じているので、セキさんの人間としての大きさにも感じるものがありました。



## チェルノブイリの祈り

スベトラーナ・アレクシェービッチ著  
松本妙子（訳）岩波現代文庫1040円＋税

福島第一原発の重大事故から5ヶ月。いまだに収束の目処はたっていません。私たちはチェルノブイリの原発事故から何を学んだのでしょうか？

本書は著者がチェルノブイリ原発事故から10年目に事故に遭遇した人々が体験したこと、見たこと、考えたこと、感じたことを聞き出し、事実の中から新しい世界観、新しい視点を引き出しています。

核戦争が起きた場合に備えたマニュアルやシェルター、防災具は用意されていたのに放射能被害には使われなかったこと。備蓄されたヨード剤は倉庫に眠っていたこと。食べられない食物が廃棄されずに安く売られ、食べている人々。放射能を放つために廃棄されたブルトーザやトラックなどが盗まれて何処かに消えてしまったこと等、思いがけない事実が語られます。

ベラルーシ共和国の5分の1に及び土地は汚染されたまま、人々はその地に暮らしている。内戦やその他の迫害に遭って、居住禁止区域に暮らさざるを得ない人々。圧巻は燃えさかる火を消して回った消防士の妻の話です。放射能による夫の身体の崩壊を話しているのに尊厳ある人間の姿を伝えていて、著者の真摯なインタビューが慟々と伝わってきました。どんな思いを胸に秘めて生きてきたのか、巨大原発事故に遭遇した人々の悲しみや怒り、そして思索の過程を鮮やかに描き出しています。

福島原発事故でその地に住めなくなった人々、農作物への被害、仕事を失った人々。どれもがチェルノブイリと重なり、とても平静な気持ちでは読めなかったです。日本の政治にも怒りを覚えます。原発事故後、周辺住民の救済はまったく進んでいません。国民不在の政治にはあきれてしまいます。

広島。長崎の原爆を体験したことを、もう一度考えてみる必要があるのではないのでしょうか？

## 三陸海岸大津波

吉村 昭著 文藝春秋文庫 438円＋税



A紙の朝刊に駐在記者が書く被災地日記があります。南三陸の戸倉小学校の児童、教師の話です。児童91人は、教師と共に高台にある神社に避難。みんなで身体を寄せ合い、たき火にあたって一夜を明かした。寒さと恐怖を吹き飛ばすように神社は歌声で包まれた。卒業式のために練習していた歌だった。—今月21日、間借り先の廃校で5ヶ月遅れの卒業式が開かれた。23人の卒業生は目に涙を浮かべながら「旅立ちの日」を歌ったという記事。全員無事で良かったなあ嬉しかったです。

青森、岩手、宮城の三県に渡る三陸海岸は明治29年、昭和8年、昭和35年の3度も大津波に襲われ、人々に悲劇をもたらしました。大津波はどのようにやってきたのか、生死を分けたのは何だったのかを体験者の貴重な証言をもとに再現した記録です。

津波が発生するとき大砲のような音が、東北地方から北海道まで聞こえたとか、子どもの作文には「家の屋根に盛り上がった波が妖怪のようだった」と書いてあった話など。津波がきたら、家財には目もくれず、高い所に身一つで逃げよ。激しい引き潮をもって始まるのを通例とするから潮の動きに注意せよとか、遠雷或いは大砲のごとき音がしたら津波の来るおそれがある等と語り伝えてきた地域もありました。公式記録には残されていない場所にまで、津波が届いていたとされる高さなど、貴重な証言を集めていて、著者の取材力と、言葉の豊かさに引き込まれました。著者は三陸海岸が好きで、毎年のように足を向けたと書いています。村人たちから津波の話をしつぱしば聞いたことが、この本を書いたきっかけであったとありました。

1960年、チリ地震津波の記録では「のっこ、のっこことやって来た」「モクモクと水面が盛り上がり押し寄せてきた」と遠くから津波がやってくる不気味さを表現しています。

3.11が1000年に一度の大震災と言われますが、どこに住んでいてもいつ災害に遭うかわかりません。忘れないように記録し、語り継ぐことの大切さを考えさせられました。

解説で高山文彦氏は吉村氏を卓越した記録者と評価し、記録することの叶わなかった人間の声ばかりか、草や岩や魚や水といった無言の声まで運んでこようとすると書きました。日頃から自然からのメッセージを聞き取ることも大事なことです。



8.6赤岳のエソコザクラ

原発関係の本がたくさん出ています。小出裕章氏の「原発のウソ」も平明でわかりやすかったです。

少しでも読みやすく、柔らかい文字に変えて見ました。みなさまのご意見をいただきたいです。



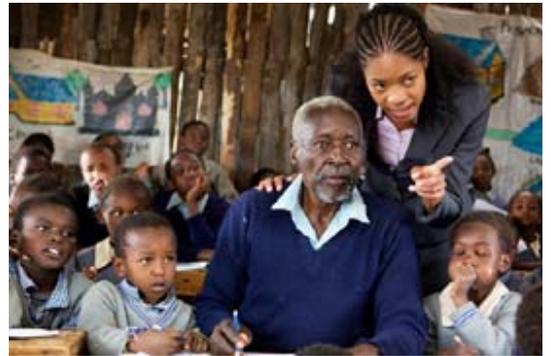
7.23鳥海山のニッコウキスゲ

# 映画

## おじいさんと草原の小学校

イギリス ジャスティン・チャドウィック監督

イギリスの植民地支配から独立して39年後の2003年、ケニア政府は無償教育制度を導入。何百人もの子どもたちであふれる小学校を、それまで教育を受ける機会がなかった84歳の老人マルゲ（オリヴァー・リトンド）が訪れます。文字を読みたい一心で、何度も門前払いされてもあきらめない彼の熱意に動



かされた校長ジェーン（ナオミ・ハリス）は、周囲の反対を押し切ってマルゲの入学を認めます。小学校入学を果たしたマルゲの勉強にかける情熱が、歳の離れた子どもたちも変えて行きます。各国メディアに取り上げられるなど、結果的に政府にも影響を与えることになるのです。実話の映画化です。

マルゲは教育を受ける機会がないまま、独立運動に参加し、妻子を殺され、何年も収容所に収監されて拷問を受けたことが回想で語られます。彼は文字を学び、大統領府から送られた手紙を自分の力で読みたくて小学校に入学したのでした。学ぶことは、自由に生きるために必要なのだと訴えます。

2005年には首席に選ばれるほど優秀な生徒であり、同年に国連の国際議会でスピーチの場を与えられると今なお1億人以上いるという学校へ通えない子どもたちの窮状を訴えました。

子どもたちの笑顔がすてきです。マルゲと子どもたちのユーモラスなやりとりも良かったです。なかなか文字を覚えられない子どもに、工夫をこらした覚え方を教える場面があり、教育者になったら、きっと子どもの気持ちをつかんで魅力ある授業をするだろうなと思いました。学ぶことがどんなに大事であるか、学校なんてつまらないと思っている子どもたちにも観てもらいたいです。学ぶことに年齢はないんだと勇気づけられました。

マルゲを演じたのは、ケニアのテレビ局のニュースキャスターから、俳優になった人だそうです。存在感があり知的でした。



## ジュリエットからの手紙

イタリア ゲイリー・ウィニック監督

名作『ロミオとジュリエット』の舞台であり、世界遺産にも選ばれた愛の都・ヴェローナ。その街にはジュリエットの生家があり、年間5000通もの恋の悩みが届けられています。そして、“ジュリエットの秘書”と呼ばれる女性たちが、その手紙に返事を書いています。ジュリエットからの手紙が導いた実話から生まれた物語です。

物語は50年前に出した恋の悩みの手紙に返事が届いたことから、今は65歳となったクレアが孫とともに遠くロンドンからイタリアへ初恋の人を探す旅に出ます。返事を書いたソフィがその旅に同行します。

初恋を探すイタリアの旅は、太陽の光と、オリーブとワインの香りがあふれる、ロマンチックなロードムービー。クレア（ヴァネッサ・レッドグレイブ）が美しく気品があり、初恋の人に寄せる可愛さも無理なく演じ素敵でした。クレアに返事を書いたソフィの人生も変えて行くのです。

ちょっとした勇気があれば、人生をやり直すことだってできるのだと、クレアを見て思いました。

小さな映画館を見渡すと、60代と思われる女性がいっぱい。子育てが一段落して、これからの人生を謳歌しようという女性たちでしょうか？肩が凝らなくて、イタリアの片田舎を旅する楽しさも味わえました。

## 被災者支援オリジナルTシャツが好評です！

「東日本大震災市民支援ネットワーク・札幌」通称むすび場ではさまざまな活動を行っています。うけいれ隊では、札幌に移動して来られた方たちの支援に奮闘しています。現地ボランティアや、夏休みを楽しく過ごしてもらおうと福島の子どもの受け入れ活動もしました。



被災者を励まそうとTシャツを作りました。Tシャツを3500円で買うと、1枚は自分に、もう1枚は被災地の方に届けられます。買って、着て、気持ちよく、更に、東北の企業の支援と被災地の方の衣類の補充と、応援する気持ちをまるごと込めたむすびばTシャツです。

デザインは、福島在住のグラフィックデザイナー、大久保直子さんが制作、札幌在住の版画家結城幸司さんのご協力を得た、奇跡のコラボです。

左のメッセージカードは池田さちえさんが作りました。残念ですが在庫は少しのようです。むすび場は札幌駅近く、Lプラザで開設しています。どうぞ時間のある時にお立ち寄り下さい。

  
【A柄】 クローバーとアイヌ文様  
日本古来の「守る」意味を持つおまじないである  
結紐と、同じく、身を守るために衣類に画される  
アイヌ文様を組み合わせたものです。  
この結び紐は、幸福を招くクローバーの愛らしい  
形に、福島在住のデザイナー、大久保直子さん  
が、むすびばをイメージして作られました。  
世界各国で、紐を編んだり結わえたりすることによって、思いを込める  
習慣があり、むすびばでも作られている、ミサンガにも共通します。

  
【B柄】 白フクロフとクローバー  
フクロフは、アイヌ語ではコタンコロカムイと  
よび、土地を営む自然を守る神さま、美知の結  
束を表します。この白フクロフは、札幌在住  
の版画家、結城幸司さんが、震災による様々な  
状況からインスピレーションを得て創られた、  
物語の登場生物であり、反原発のシンボルでも  
あります。次世代のために、新しい様々なエネルギーを選んで  
くださるよう、書きさと願いが込められています。

Every life is connected.  
Every mind is connected.  
Let's connect for a bright future.

東日本大震災市民支援ネットワーク・札幌 むすびば

# 誕生日の記念になりました。

記事になるとは思いもよりませんでした。私の誕生日（7月23日）のいい記念になりました。道内に住む読者からたくさんのメール、お手紙、電話を頂きました。拙い文章ですが、これからも山や森や川、そして平和の大切さを伝えて行きたいと思えます。

年(平成23年)8月16日(火曜日)

北海道新聞(夕刊)

8

## 生きる

A4判の不定期発行個人誌「銀河通信」を創刊して23年。気がついたら167号になっていた。

創刊は1988年7月。独身時代に関わっていた自然保護団体「大雪と石狩の自然を守る会」の仲間と富良野岳に登った感想や自宅の庭で星を見た話を手書きでつづった。「始めたころは、長男や家族の話が多く、友人たちに郵送していました」。号を重ねるうちに、自然環境、平和、

ひぐち・みなこ 1949年、日高管内平取町生まれ。東京の専門学校を卒業後、旭川医大病院で臨床検査技師として働く。85年、結婚を機に札幌へ移り、「知里幸恵記念館」設立運動に参加する。現在「北海道高山植物保護ネット」「森と川を語る会」会員。江別市で夫、長男と3人暮らし。

個人誌「銀河通信」発行

樋口 みな子さん(62)



これからも主婦業の合間に自分の言葉でつづっていきたくと話す樋口みな子さん

## 子どもの幸せ願い23年

原発問題など、子どもたちの幸せを願うテーマに関心が高まり、90年1月には、家族で沖縄旅行をした際、基地の様子を「沖縄戦跡ルポ」として書いた。

それが労働・住民団体、個人の新聞が出来栄えを競う「全国新年号機関紙誌コンクール」で優秀賞を受賞。「思いを伝える文章を書き続けた」と意を強くした。

当初2号だったが今では8号。心に響く本や映画、イベントなども紹介している。コピー印刷でも郵送経費を払う定期購読者が250人となり、4年前からインターネット配信も始めた。

文章を書くことが好きになったのは小学生のころ。営林署勤務の父は転勤族だった。「転校を繰り返していたから、なかなか友達ができなかつた」。放課後は図書館で本を読んだり、感想を書く時間が楽しかった。先生に作文を褒められたこともあり、見たこと感じたことを、文章で表現することが好きになっていった。

多感な中学時代、「アンネの日記」を読んだ。アンネの観察力と批判力は、「銀河通信」を制作するうえで物差しになっていく気がします。最近では登山リポートが多く、3年前には、日本山岳会のヒマラヤ環境調査隊に参加した体験記を掲載。高山植物の盗掘問題や自然環境の大切さを伝えている。

「未来を担う子どもたちが安心して暮らせる地球を残したい」。願いを込めて星好きの夫と名づけた銀河通信。「読んでくれる皆さんがいるから続けられるんだと思います」

文・のしろや 秀樹

(フリーライター)

写真・北山 勝章

(フリーカメラマン)

購読料をありがとうございます(敬称略) 7.2~8.20

安川誠二(札幌市)3000円(カンパ含む) 赤石貴恵子(札幌市)2000円(12号分) 佐藤登代子(町田市)2000円(12号分) 前原満之(宮崎市)1000円 菅沼宏之(札幌市)2000円(12号分) 山本博(福岡市)5000円(18号分とカンパ) 木村玲子(札幌市)2000円(カンパ含む) 芳村宗雄(札幌市)3000円(カンパ含む) のしろや秀樹(札幌市)2000円(カンパ含む)

高澤光雄(札幌市)本「はるかなるヒマラヤ」山本博(福岡市)著書「九重山の花暦」福原正和(札幌市)切手4800円分とCD高柳昌央・喜代子(東京・文京区)切手5000円分

合計 22,000円は印刷と送料に、切手は送料に使わせて頂きます。ありがとうございました。高澤さん編集、坂本直行著「はるかなるヒマラヤ」は今号で紹介させて頂きました。